

---

# 隠れキャラ

魔狗羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隠れキャラ

### 【Zコード】

Z5086A

### 【作者名】

魔狗羽

### 【あらすじ】

友達……俺ら学生が最も大切とする存在。だが、非情で残酷な“ゲーム”により、その友情はひび割れていく……。“ゲーム”に立ち向かう五人。性格の違いから、それぞれの行動に違いが生じていき……たどり着いた真実とは……！？

## File 1： 独りの夢

「健、今日何する？」

純が公園のぶらんこで立ち乗りしながら俺に聞いてきた。  
「ん…何するつつてもね…」

「…何だよ、もういいよ。帰ろつぜ、皆…」

…”皆”…？

俺は今、昔からの親友・純・と一人で話していた…はずだった。  
それなのに、”皆”…？

…すると、公園の陰からクラスの皆が出てきた。

「…な…！」

元々、純はこんな短気な性格ではない、といつか何も怒らせること  
は言つていない。

しかも、突然現れたクラスの友達四十人も怒った、といつより物凄  
い冷たい目付きで俺を見下している。

「な…なんなんだよ！俺がなんかしたつづーのかよ！」

俺の叫び声に反応したのかそうでないのか、友達が一人、また一人  
と公園から去つていく。最後に純が「お前は一生ゲームの中でもが  
き苦しむんだよな、この裏切り者が…」と言い残して、去つていっ  
た。

…”ゲーム”…？

ただ一人で立ち尽くしていた時、いきなり視界が真っ赤になり…

…目が覚めた。

…夢？朝から随分変な夢を見てしまった…つて、ここどこだ！  
家…ではない。絶対。一応ベッドの上で、掛け布団もかかっている。  
でも…。

何が何だかわからず、眠気がすっかり覚め、ベッドから飛び起きた。

そして、気付いた。

腰に、黒いベルトのような物が巻き付いていて、ちょうど日曜の朝にやるレンジャーもののアニメの戦闘服のように、ベルトの前（お腹のあたり）に何か付いている。それには蓋がついていて、指をかけるとカパツという音と共に、簡単に外れた。すると、蓋を開けたのと同時に、中から紙がはらり、と落ちた。その紙を拾い、その小さい面積の中にぎっしりと書いてある文字を読み始めた。

「運命のサバイバルゲーム！大切な仲間を蹴落とし、自分の命を守り通す、そんな勇者は誰だ！」

なんだ…これ…？

運命のサバイバルゲーム…？

大切な仲間…？

多く疑問を抱えたまま、とりあえず読み進む。

「このゲームのプレイヤーは五人！ゲームのクリア条件は簡単！自分以外のプレイヤーのベルトに付いているスイッチを押し”ゲームオーバー”にすること！もちろん自分で自分のスイッチを押すのは自殺行為！それでは… GOOD R a c k ! ! 」

“…どうこうことだ！？健は夢が覚めてから何回目かの疑問を呟いた。それに…。

健は”大切な仲間”と”プレイヤーは五人”という言葉に引っ掛けっていた。

つまり、自分以外にも自分と同じ状況下に置かれている者があと四人、いるということだ。

それに…なぜか”ゲームオーバー”にとても恐ろしい響きを感じる。”自殺行為”というのも…。

と…兎に角！この近くにいるはずの”仲間”を捜そう。一人よりも二人の方がいいに決まってる…いやそれ以前に一人だと怖い。

そして、冷静になつてゆっくりと部屋を見回した。さつきまで気が動転していてろくに見ていなかつた。学校の教室を一回り小さくしてくらゐの広さの…多分寝室だろう。一つあるベッドの他にたんすや本棚等が置いてある。

そして、ドア……。

この先に何があるのかはわからない。

が、ずっとここに留まつてゐるわけにはいかない。健は意を決してドアを開けた。…廊下に出た。ホラーゲームに出てくるような薄暗い廊下ではなく、ホテルの廊下のような明るさで、正直嬉しかつた。そして今更ながら気付いたことがもう一つ、自分の服装である。これは…迷彩服…？ちゃんと同じ柄の帽子や靴まで付いている。さらには、壁に掛かっている時計をみた7：20をさしている。…まあこれが正しいとは言えないが…。

さあ、扉は沢山ある。早く仲間を見つけなければ…。

何処だ……ここは……！

眠りから覚めた拓・火宮 拓・は、辺りを見回した。

俺は……昨日家で寝たはず……？

意味がわからず部屋にたつた一つ取り付けられたドアを開けた。すると、明るく、まるで城が何かのように横に長い廊下に出た。

瞬間……拓は寒気がした。

拓はすぐにドアを閉めた。

……なんだつたんだ……今……

そして、さっきから気になっていたベルトの真ん中の蓋を開けた。すると、スイッチ……のような物が現れ、同時に蓋で密封していたところにあつたであろう紙が床に落ちた。

拓は興味本位でスイッチを押そうとしたが、落ちた紙が気になり、それを拾つてみた。活字がぎつしりと書いてある。

「運命のサバイバルゲーム！大切な仲間を蹴落とし、自分の命を守り通す、そんな勇者は誰だ！」

なんだこれ……？

「このゲームのプレイヤーは五人！クリア条件は簡単！この館内に潜む敵キャラを見つけ、その敵に付いているスイッチを押すだけ！又、自分のスイッチを押されたり、館から一步でも出たら、その時点で”ゲームオーバー”だ！それでは……GOOD R a c k …！」

へ……え……！

何が何だかわからないけど、面白そうだ。見知らぬ館で”ゲーム”をする。登場人物は自分。仲間と協力し、敵キャラを追い詰める、とこうミッション。この現実とのギャップ。最高だ！

拓はこの理不気な状況の中で、今自分がおかれている立場を楽しんでいた。

：で、仲間がいるんだよな… まず仲間を見つけるか…。拓はドアを開け、わくわくしながら廊下に出た。そして、隣のドアを開けてみた。106号室となっている。ふと自分が出たドアを見ると、105号室となっていた。

うう……ん……これは……どうこういとだ?

目を覚ました仁・高野 仁・は、ベッドに腰掛け、考えていた。  
こうしてもうかなり経つと思つ。

ここが何処なのか?誰の仕業なのか?自分以外のプレイヤーとは誰  
なのか?そして…クリア条件の意味とは…?

仁のベルトの蓋の中の紙にはこう書かれていた。

「運命のサバイバルゲーム!大切な仲間を蹴落とし、自分の命を守  
り通す勇者は誰だ!このゲームのプレイヤーは五人!クリア条件は  
簡単!自分以外のプレイヤーのベルトに付いているスイッチを押し  
”ゲームオーバー”にするだけ!もちろん自分で自分のスイッチを  
押すのは自殺行為!それでは… GOOD R a c k ! !」

仁は小学校の時に学校から逃げ出したうさぎの居場所を、その話を  
聞いただけで推理し、それが当たっていたため、  
「安樂椅子探偵」等と呼ばれていた。勉強は得意ではないが、何故  
かいじわるクイズや推理もの等は大得意だった。  
だから、そのプライドが、部屋から一歩も出さずに”解けない”謎を  
解こうとしているのだ。

そう。この謎がこのままでは動かないのは解つているのだ。

因みに仁には双子の弟がいる。高野 涼、といいうらしいが、友達の  
中で涼の姿を見た者は一人もいない。というのも、涼は不登校の引  
きこもりだからだ。理由は不明だが、顔や声はそつくりらしい…。  
しばらくじつとしていたが、もつどうしようもなくなつて、仕方な  
くドアをゆっくりと開けた。ドアを振り返ると102号室となつて  
いた。また、廊下の壁に掛かっている時計は7:45となつていた。

## File 5：友達は敵？

健は103号室とプレートが掛かっている隣の部屋のドアを開けた。すると…

「…蓮…」

「…！お、健ちゃん！」この部屋は健が起きた時にいた部屋、つまり今さつき出ていった部屋と同じ造りになつていて、ベッドの上に蓮・渡美・蓮・が腰掛けていた。

「なんだ～健ちゃんいてくれたんすか～！俺今一人でビビりまくつてたんすよお～！」

「蓮…」

蓮は基本的にノリがいい。いつも周りがついていけなくなる程だ。でも今はそれが嬉しかった。

一人ではなくなつたことが。

”仲間”が”友達”だつたことが。

”友達”が明るく話しかけてくれたことが。

「にしてもさ～、これどういう意味なんだろ～な」

蓮はこの”ゲーム”の説明書らしき”あの”紙を片手の親指と人差し指でつまんで、ぱらぱらさせている。

「あ…ああ。でも、このスイッチを…」

「押したらゲームオーバーなんしょ？」

「う…ん…」

「でもさ、これおかしいよね～。なんで”仲間”を”ゲームオーバー”させなきゃいけないんだろうね？」

蓮は調子のいい奴だが、観察眼は人一倍だ。

健もそれには違和感を感じていたのだが、結局今までに答えは出せていない。

”安楽椅子探偵”がいたらな……無意識に健はいつも一緒に遊んでいる仁のことを思い出していた…。

## File 6：陰の予感

「どうあえずや、他の三人探しやつやおつよ。もしかしたら」「とか純とかいちゃつたりするかもしれないし〜！」

「そうだな……。……そういえばこの部屋103号室だよな……」

と言つて、健は部屋のドアを開けて自分の部屋のドアを見た。104号室となつてゐる。

俺が104で蓮が103だつたら……。  
確信はない。ないけれど……。

他の三人も101、102、105に居るのではないか……。

健は直感でそう感じた。

このことを蓮に伝えようと103号室の部屋に戻つたとしたら、その時……

「あ……け……健……」

「ん……」の声は……あわ……か……

「健だよな……おい！健！」

「ひ、仁……？」

振り返ると、”安楽椅子探偵”の仁が立つていた。服装は自分や蓮と同じ迷彩服にスイッチ付きのベルト。

「やつぱり……いたんだ！」

「え……じゃあ他の奴らも？」

「うーん……蓮はいたんだけど、他はわかんない……」

「そつか……」

ここに来てから、全てが驚きとため息になってしまつ。

「運命のサバイバルゲーム！敵を全て破滅させ、自分の命を守り通す勇者は誰だ！このゲームの敵キャラは四人！クリア条件は簡単！全ての敵キャラのベルトに付いているスイッチを押し”ゲームオーバー”にするだけ！又、自分のスイッチが押されても”ゲームオーバー”だ！それでは… GOOD R a c k !!」

ベッドの上に置かれた一枚の写真と一枚の紙切れ。写真には暗い牢屋のようなところで一人の少女が手足を縛られているところが写されている。紙切れの方は”運命のサバイバルゲーム”云々と書いてあるものが一枚と…。

「このゲームで”鬼”は君だ。廊下に掛かっている時計が次に7：00をさした時、つまり12時間が制限時間だ。その時までに四人全員を”ゲームオーバー”にさせていたなら、君の勝ちだが、もしそれが出来なければ君の負けだ。君が勝てたら君を現実の世界…日常へと戻そう。勿論、君の妹も。だが、君が負けたら、君は”ゲームオーバー”だ。そして妹も残念ながら…ね。」

……」これが一枚目。

そう、写真の少女とは純・渋木 純・の妹、咲である。

うそ……だろ？

信じられなかつた。自分や妹の非常事態に。

紙を読んでから急いでドアを開け、時計を確かめた。7：45になつていたと、右の方からガチャ、という音が聞こえた。誰かがドアを開けて出てきたのだ。純は反射的にドアをさつと閉めたが、一瞬 - - - 見えた。自分と全く同じ服装の拓を - - - 。

閉めたドアに張り付いて、純は戦慄した。自分がゲームオーバーにしなければいけない”敵キャラ”が…自分の友達であることだ。

まだ拓しか見ていないが、そんな偶然はありえない。絶対にあの

三人は健、仁、蓮だろう。

そして、”ゲームオーバー” - - - - -。

それは、最悪の場合、”死”だろう。妹の状況が、そう語っている。

取るべきものは、家族か、友達か - - - - -。

捨てるべきものは、家族か、友達か - - - - -。

純は、ベッドに腰掛けて苦悶した。

106号室へ入った拓は戦慄した。この部屋は自分が最初にいた部屋と同じ造りになつてゐるのだが、ベッドの上に、人が倒れているのだ。いや、普通だつたらただ寝ているだけだ、と思うかもしれない。が、その人は自分と全く同じ服装をしているのだ。もちろんスイッチも…。

急いでベッドに駆け寄ると、すぐ側に小さい紙切れが置いてあることに気が付いた。

「ゲームオーバーになつたら…死ぬんじゃないかな？」

……！

これまでの遊び感覚はどこかへ消え去つてしまつた。これは本当の”サバイバル”なのだ。自分一人を守るために、他人を蹴落とす…。この紙切れの文のフレンドリーさも、逆に恐怖を感じさせた。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い……

拓の心は既に恐怖心に支配されていた。

やらなきや、やられる……。

拓に、野性本能が、芽生えた。

- - - - -

「……そういえばこのゲームで、制限時間とかあんのかな。一人に

なんない限りここから抜け出せないとか?」

健は、蓮や仁と出合つてから、このゲームについていろいろ話し合つていた。

「ん~、どうだろ~ね」

「もし無制限のデスマッチだとしたら、誰かを代表にして、それ以外の四人が自らスイッチを押す、てのもいいかもね」

「そう、まだこの三人はこのゲームの恐ろしさに気付いていないのだ? 「でも俺らをこんなわけなわかんないここに連れてきて”ゲームオーバー”がそんな簡単なものじゃない気がするんだ」

「何それ?」

「つまり……ゲームオーバーになつたら、ただじや帰れないと思つ

その時、廊下の時計は8:10をさしていた。

「とつあえずや、あとの一人を探しあやおつよ。こつまでも『仁長官』いのも難だしね」

「おつけへつす『仁長官』

蓮……。

「じ、じやあばばらばらになつて探そつ

『ばばらばら』……

健は孤独が怖かつた。が、

「うん。 その方が効率いいからね

の一言で切り捨てられてしまった。

でもやつぱり三人共怖いのだろう。数秒間の沈黙……。

「……それじゃあ、行くか」

- - - - -

部屋を出て、健は左へ、仁と蓮は右へ歩を進めた。廊下の西端に階段がついているのである。そしてそれは、上へのものも下へのものもあった。どうやらここは三階建てで、ここは一階のようである。健はまく下へ向かった。

一階はホテルのロビーのようになっていた。

( いなーいな………… )

仁と蓮は三階へ行っていた。そこは一階と同じ造りで、両端にある階段と階段を廊下が繋いでいて、その片面側にドアがついていて、それぞれ201、202、203、204、205号室となっている。

「じゃあ俺あつち側から順番に見てくから、蓮はこっちから頼む」

「かしこまつ~ だしちゃー」

205号室のドアを開けた。やねつ~一階の部屋と同じ造りである。

仁は204号室へ移った。が、204号室のドアを開けたまま、固まってしまった。

「…………な……なんで……お前が…………」

201号室に入った蓮は、慎重に部屋を調べる。皆の前では気楽そうに見せてはいるが、実は、頼りにされたいのだ。信頼されたいのだ。注目されたいのだ。それが、こいつら行動に走ってしまった。すると、遠くから仁の叫び声が聞こえた。

健  
…  
?

訳がわからず、205号室へ向かつた。が、仁の姿は無い。204号室か？！

るのだ。

「ひ  
仁  
い  
い  
！」

息は……もうなかつた。

## File10：狂氣破滅（前書き）

「んにちはー魔羽ですー」この物語とも言えなによつた幼い文字の羅列を「」閲覧して下さっている皆さんーありがとうございます！いきなりでこんな長編というのが無謀だったのでしょうか、だんだん書きづらくなってしまっていますが、そんなこの小説に応援メッセージを送つて下さった方がいらっしゃいました！感激です！これは下手な文には出来ないな（笑）と思いながら書いていたらいつもより長くなつてしましました…。

…つて、前書きが長くて飽きたせてしまつたかもしません… 三（—）三  
それでは、じゃあ（へー）。

一階へ向かった健は「ここには何も無い」と判断し、一階へ戻ろうとした。

すると、階段から「仁」が降りてきた。

「おお！」としたの？

「おお、健か。三階には何もなかつたぜ？蓮は絶対なんかあるつづつてまだ残つてゐるけどな」

「ん……仁……だよな……。なんか違和感があるよ」

「へ、へえ～あの蓮が。意外だな」

「じゃ、俺は報告係だから、もう蓮のところに戻るな？」

「お、おひ」

「じゃあな、と言つて」は右の階段を上つていつた。

-----

蓮は独りになつてしまつた。仁は倒れ、健は - - - よくわからな

いが、仁が叫んだ

「やめろおおお！－健－－－！」

というのが気になつて、会えなかつた。

まさか…健が仁を…？

いやそんなことはありえない、と思いながらも、やはり氣になる。

仮にもさつきまで一緒に会話をしていた三人である。仲間を大切にする健がそんなこと…。

独り…。

蓮は怖くなつた。一刻も早く仲間を…話し合ひの出来る仲間を見つけなければ…。

蓮は202、203号室を調べたが、誰もいなかつた。

蓮は一階へ降りた。

- - - - -

早く…早くこのゲームを終わらせてしまわないと……。

拓は一階を彷つていた。

いつもの軽い性格の裏返しなのだろうか、助かりたい、といつ一心で”敵キャラ”を求めて彷う。

拓は一階へ向かつた。階段を降りきる直前で、”敵キャラ”の存在を確認した。

や…やつた…まずは一人…

もはや拓を支配しているのは恐怖と狂氣だけである。

だが、”敵キャラ”をよく見てみて、拓は驚いた。

あれは……健！

いくら迷彩服でも、今自分の視界に入っている”敵キャラ”は紛れも無く健だった。

拓が動搖していると、健がこちらに気付いた。

「あ……た……拓！」

と、友達であると敵は敵だ……。

普段では絶対こんなことは思わないだろう。だが、拓は”ゲームオーバーになつたら死ぬ”という事実を知つていて。

拓を狂わせているのは、死の恐怖だ。

- - - - -

「あ……た……拓！」

階段から拓が現れたのだ。

（やはり拓もいたのか……）

健の呼び掛けに応じずに、ゆらゆらと危なつかしい足取りでこっちへ向かってくる。

健は、殺氣を感じた。

「あ…まで、おいー拓！」

聞こえない振りをしているのか、本当に聞こえないのか、無反応だ。

健は恐怖で動けなかつた。

その時 - - -

「拓ー！やめろー！」

そう言つて階段を駆け降りてきた - - - 純が拓を後ろから羽交い締めにし……スイッチを押した。

「 ……ひーー！」

拓は倒れた……死んだ。

友達の手によつて……。

「 健……ごめんー！」

そう言つて純は土下座した。

「 ……え？」

「ど…どいつことだよ…」

すると、純は少し顔を上げ、また土下座のまま俯いてしまった。

「おい純…なんとか言えって…」

そうして、ようやく純は語りだした。

自分の妹が捕われていること。自分にこのゲームで”鬼”的号が与えられたこと。自分と妹を守る為には友達を殺さなければならぬ、また友達を守るために自分と妹を犠牲にしなければいけないと。

「今も階段の上から見てたんだ。拓が健を殺そうとするとい。 そいやつて俺以外の奴等が殺し合ってくれれば俺が殺すのは一人で済むと思った…妹と…自分の為に…」

「じ…純…」

「はは…俺は最悪な奴だよな…友達同士の殺し合いを黙つてみてたんだから…しかも死ななかつたから…悔んだしな…」

「……」

健は何も言えなかつた。言つてはいけないような気がした。長い間考えに考え抜いて出した結論に文句はつけられなかつた。例え犠牲が自分達だという結論だつたとしても…。

- - - - -

一階にも誰もいない…

一階を蓮はしつと探していたが、一向に仲間は現れない。一階へ行ってみようかな…。

すると、誰かが一階から上がってきた。

「お~い!」

無反応。

「お~い! 誰だ…」

蓮は固まつてしまつた。死んだはずの仁が…いる。

「え……ひ……仁……なん……?」

仁「がゆつくじと近づいてくる。

「蘇生したのさ…」

「う…や…めん…」

蓮は廊下に倒れた。

「じ……じゃあ……なんで拓をひる……倒したんだ?」

「なんで殺した、と言おうとしたが、土下座をやめて床に座つてうなだれている純にはきついだらうと思つた。」

「それは……嫌だつたから……。狂つた拓が狂氣に全てを任せて友達を殺しているのが、耐えられなかつたから……。」

キョウキニー、スベテヲマカセテ - - -

「俺はもうこれ以上友達が死ぬのを見るのが嫌なんだ!……仁だつて……狂つた奴の犠牲になんかなりたくないなかつたんだ……。」

「仁……?」

「知らない……のか?三階で仁が204号室のベッドに倒れてたよ……仰向けて顔が青かつた……。」

「な……仁が!……!……ちょっと待てそれ何時くらいかわかるか?……え……た、確か9:20くらいだつたかな……三階にも一階と同じじところに時計があつてさ……それでわかつたんだけど……」

「一階にある。今は……10……00だ。」

「さつさつ!一階に来たけど……確か9:30くらいだつたぞ」

「え……嘘だろ……じゃあ三階へ行つてみよつよ」

「だ……誰だ？」

三階へ上がるためには階段で一階を通り、床に俯せで倒れている誰かを発見した。

赤いカーペットが敷かれている明るい廊下。それが迷彩服を目立たせている。

「な……蓮！」

俯せになつている蓮を抱いて息を確認する。……やはり、死んでしまっていた。

「へそー。」

「純……」

「もう三人も……あとは俺達だけか……」

三階に着いた。健は204号室のドアを開けた。が……

「……いないじやんか」

「え……おい、嘘だろ？」

純は部屋の中に入った。……いない。

「部屋の番号間違えたか……？」

そのあと、2011、2012、2013、2015年を全て調べたが、  
仁の姿は見えなかった。

「いない…よ？」

「そんなはずは……ひ、仁が消えた……」

## File13：狂氣から日常へ

二階。106号室。一人の男がベッドに腰掛けている。男は迷彩服を着て、ベルトを巻いている。そしてその真ん中にはスイッチがついている。

”キヨウキニ、スベテヲマカセテ - - - ”

男はくつくつと笑う。

男の隣には同じ服装の男が、ベッドに俯せになっている。

男は笑い続ける。

その時 - - -

「「「」」」

二人の男が入ってきた。一人の男の名は・東条 健・と・渋木 純  
だ。

- - - - -

數十日前。204号室にて - - -

「二人ともこのゲームを終わらせる方法が一つだけある」

「え…？」

「！」のゲームの主催者を見つけだす…！」

「……！」

ベッドには男が座っている。笑っていた。その隣には、迷彩服の男が俯せになつて倒れていた。

「お前は高野仁か？高野涼か？」

なおもくつくつと笑い続ける男に純が聞く。

「そんなものはどうでもいい。それより早く殺し合いを見せる。早く死んだ姿を見せる。…………くつくつ、みんな俺がいじめの時に言われた言葉だ」

「じゃあ…お前は高野涼か！」

ふつ、と男・高野涼・がため息をついた。

「そうだ。俺はこのゲームの主催者であり、このゲームの隠れキャラだ」

「隠れキャラ……」

「火宮のゲームの説明書には書いたがな…隠れキャラは俺だ」

「隠れキャラ…だと…？ふざけんな！強制的に人殺しさせて、しかもこのゲームを散々引っ張き回しゃがって！俺達は知つてんだ！お前の行動全てを！」

「ふつ……」

「まずお前は106号室で倒れた振りをした！そして隣の部屋の拓に見せ付け、実質上一人目の”鬼”にした！そして204号室に潜み、仁を殺したんだ！さらにそのあと、動かなくなつた仁をここに運び、俺達を攪乱させた！」

純は、一息に言つた。息遣いが荒く、はあはあと、かなり興奮している。

「お前は…お前は何がしたいんだ！これだけ兄弟とその友達の命を弄んで！何がしたい！」

「俺も言つてやりたかった……何がしたい、つてな…」

「え…？」

「俺は小学三年生の頃からいじめられ始めた。そしてそれは段々とエスカレートしていく。

俺をいじめた奴等は俺を”ゲーム”で遊んだ。

ある時は”今から三十分以内に八百屋から野菜を盗め”、と言い、ある時は”駅で五人以上の通行人を殴れ”と言つた。

それらは強制的に始められ、出来なければ”罰ゲーム”があつた。それに何年も耐え続けていた。

ある日、奴等は俺に”兄のノート三冊にペンキを塗れ”と言つてきた。

罰ゲームが怖かった俺はそれをやつた。

そして兄に何故やつたか理由を聞かれた。

俺がいじめを受けているのはなんとなく知っていたみたいだが、ゲームのことを言うと兄は驚いていた。

が、兄は”ま、頑張れよ。

いつかはそいつらも飽きたらうし”と言つた。この辛さは…”ゲーム”をやつたことのある者にしかわからない。すると突然この辛さを多くの人に知つてもらいたくなつた。これが…全てさ……だがその結束力を見せ付けられて、逆に自分の孤独を改めて思い知らされたがな…」

健と純は啞然としてしまつた。仁がそんなことを言つていたなんて…。

気がつくと、純が震えていた。

「ふざけんじやねえよ……全然お前の気持ちなんかわからんねえ！…お前は…一生ゲームの中で苦しむんだ！」の野郎！」

純が…涼のスイッチを押した。

純の言葉にはつとなつた涼は、そのままでベッドに倒れこんだ。その顔が少し悔しそうだった。もちろん、ゲームで負けたからではないだろう。

- - - - -

「おはよ〜！」やっこまーす

朝のホームルームの時間、健と純はぼーつとしていた。あれから初

めて通う学校だ。学校や家にはちゃんと休んでいた間の話はついていたらしい。

ただ、健や純の友達三人と高野涼は行方不明ということで、警察が捜索している。学校にも家にも警察にも本当のことは言つ氣がしなかつた。

二人は教室の窓を開ける。朝といふこともあつてか、日の光が眩しい。

二人と純の妹は、また”日常”の中で暮らし始めた。だがこの先日常から消え去つた友達や涼のことは、絶対に忘れないだろう。

- 完 -

# File 13: 狂氣から日常へ（後書き）

こんにちは！魔羽です！（）の後だらだらと髪を語つていいくので、飛ばしていただいて結構です（笑）

全13話の長編”隠れキャラ”！この小説は僕が初めて書いた小説です！今日これを仕上げた時には達成感で胸がいっぱいでした！FILE10：辺りで「次の話はどうしよう」と悩んでいた時に、応援メッセージ（アドバイス）をいただき、そのアドバイスに沿って最後まで頑張りました！嬉しかったです！

小さい頃から本が好きで、こんな面白い話が作れるなんて、とよく思っていました。そして今、僕は話を作る側になりました。面白くても面白くなくても、（よくも悪くも）何かを感じた方は、よければ僕までメッセージを送つて下さい！お願いしますm(—)m

では、また次の作品で（^\_\_-）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5086a/>

---

隠れキャラ

2010年12月11日02時46分発行